

学生・生徒の農業経験に関する調査 1

—アンケート結果より—

歳 森 茂・田 中 隆 子

「〇〇という坂の街に生まれた私は今まで一度も稲作作業を体験したことがない。そして秋に旅行することもなかったためあの黄金色した稲の穂をこの目で見たのは今年が初めてだった。この高松に来てあの田を見たとき本当に綺麗だと感じた。……」

これは〇年前、香川大学一般教育総合課目「稲作」において、11月9日提出した学生の作文中にあった一女子学生の冒頭の書き出しである。まだ本人が在学中のため特に伏字を使ったことをお許し頂きたい。

食糧難、勤労奉仕、稲刈作業と苦しい少年少女期を過した戦前・戦中派は、隔世の感に打たれるし、反対に米よりもパンなどをより多く主食的に利用するという一部のヤングからは、「米はわれわれにとって単に食品の一つであるのに過ぎず、その米の実る草である稲を知らないといって驚くほどのことはない」という声がかえってきそうである。

中年者から見れば、現代版「米の実る木をまだ知らぬ」であるが、話のタネにしているだけでは現実には許されない。この「稲作」だけでなく、農業に関係する講義その他で実際を全く知らない又は殆んど知らない学生が少なからず居ることは、教える側は苦勞が多いし、教わるほうも努力しても仲々理解が困難である。小・中・高で知識偏重の又は知識重視の教育を受け、それを是として育ち大学の門を楽々とくぐってきた彼等彼女等は可愛想である。見ようという好奇心があれば見たであろうものを見ずにすませてきた者は、概して大学に入っても科学する心、創造性が乏しいようである。「タネまき」というものは生れて初めてです。楽しいもんだと知った」という学生を毎年相手にする。幼稚園以来どこかでやって欲しかったことを、彼等が専門課程に入ってイロハから手ほどきする大学教官としては、初等中等教育の現実に疑問をいだかざるを

得ない。

今までこの「稲作」で多少とってきたアンケート結果と、本年5月下旬又は6月上旬にとった香川大学学生（5月29日、「稲作」において）、高松市内のF中学（5月25日）、大津市の滋賀大学学生（6月2日、後記の木島氏の講義の際）の三つに同一アンケート文で行なったアンケート結果を合せてここに報告する。極く一部の学生層に過ぎないので、これだけの結果から〇〇大学の学生は、又は中学生はどうだということを断定はできないが、現代の学生・生徒の農業に関する接触の実態を公開し、今後の教育対策の資料としたい。本年のアンケートにおける対象者の構成は次のようである。香川大学男子（教育学部15名、経済学部24名、農学部31名、法学部25名、全部1年生）計95名、香川大学女子（教育学部1年49名、2年1名、農学部1年4名、法学部1年4名）計58名、滋賀大学男子（1年33名、2年6名、3年8名、4年2名）計49名、滋賀大学女子（1年62名、2年15名、3年2名）計79名——滋賀大学はいずれも教育学部だけである。F中男子は1年38名、2年37名、3年35名、不明2名計112名、F中女子は1年34名、2年37名、3年43名計114名である。大学生、中学生共集計に値しない内容のアンケート回答は除外した。なお、調査に当り香川大学 角 節郎氏、滋賀大学 木島温夫氏にご配慮頂いたことに深謝する。

1. 実っている風景を見たもの

1) 総括的にみて

まず初歩的なことをアンケートしてみた。イネを始め26種類の作物や果樹について、その実や果実または食用部分が実っている風景を見たことがあるかどうかを尋ねたものである。即ち、次のようなアンケート文である。

1) 次の種類について、実際に実や果実または食用部分が実っている風景(6),(7),(8)については掲げている風景を目で見たことがあれば、その番号に○をつけて下さい。

- (1) イネ、(2) 小麦、(3) フブ、(4) 小豆(あずき)、(5) 大豆(だいず)、(6) さつまいも、(7) ジャがいも(ばれいしょ)、(8) 里いも(さといも・こいも)、(9) たまねぎ、(10) だいこん、(11) トマト、(12) なす(なすび)、(13) カキ(柿)、(14) りんご、(15) なし(梨)、(16) くり(栗)、(17) みかん、(18) 柿(うめ)、(19) もも、(20) すもも、(21) 西瓜(すいか)、(22) いちご、(23) ぶどう、(24) びお、(25) オリーブ、(26) バナナ

その結果、まず表1-1Aのような驚くべき事実が判明した。イネの穂並を見たことのないのはF中女子に3%（殆んど1年生）、香川大学（以下 香大と

表 I-1A 突っている風景を見たもの——性の差と地区の差 (単位：%)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	人数
F中男子	100	91	14	16	32	84	77	36	62	82	79	89	88	38	36	74	93	68	53	31	80	91	62	78	54	20	112
F中女子	97	89	13	18	26	92	82	35	61	84	87	89	94	49	29	75	96	68	46	32	78	93	76	87	47	18	114
香大男子	99	83	12	35	45	83	84	54	75	93	95	91	97	43	52	83	92	66	57	39	92	98	81	80	22	21	95
香大女子	98	88	9	17	28	93	84	41	66	90	90	90	97	60	33	76	98	59	57	33	90	98	88	90	38	19	58
滋大男子	100	67	0	31	41	88	92	51	73	78	90	88	92	39	55	84	76	57	41	22	88	90	71	45	0	22	49
滋大女子	99	47	3	18	28	91	85	41	77	83	95	100	95	40	62	79	79	69	38	18	85	99	72	58	3	12	78

表の No. は問いかけ文中の No. と同じ(作物または果樹)である

略称) 男子に1%, 香大女子に2%, 滋賀大学(以下 滋大と略称) 女子に1%あった。概して女子に偏している。全体的にみて低いのは, ソバ(3), 小豆(4), 大豆(5), 里いも(8), りんご(14), なし(15), もも(19), すもも(20), オリーブ(25), バナナ(26)等であって, 50%またはそれ以下である。ソバ, 小豆の栽培はうんと減って仲々見られなくなっている事実はある。日常の食生活に大豆または大豆製品が重きを占めているのにも関わらず大豆が26~45%の低さであるのは奇妙な感じがする。あるいは大豆と枝豆の区別がつかない者もいて「大豆(枝豆にもなる)」と書けばもっと数字が上がったかも知れない。里いもは35~54%であって, 掘り上げ時期は極く短期間でその他の時期は殆んど土の中にあるために見られにくいわけであろう。りんごについて, 香川県には暖地りんごの中成子(青りんご)が約7haあるが, これは一般に見られやすいところに存在しない。したがって, りんご栽培に縁のうすい滋賀, 香川では, りんごを見たことのない者が多いのも当然であろう。しかし香大女子では60%もあって, 大豆の28%と較べると大差があり, 滋大女子も40%対28%であって, いずれもりんごのほうが高い。次の表1-1Bにあるように, 大豆のほうがもちろん栽培面積が多いわけであるから, これは当然旅行(例えば北海道とか長野などのりんご地帯への)によって見たものと推定される。なしは普通防風垣を施していたり収穫まで袋掛けをしていることが多いので, 見られにくいわけで29~62%の数字となっているのはうなづけることである。香川に少く滋賀にやや高い。すももは香川県では散在樹としても広く分布しているし, 普通, 女子は男子よりすももが好きであるといわれるのにF中女子で32%, 香大女子で33%という数字は理解しにくい。オリーブは香川県に散在樹として多いし, 県木, 県花として指定する動きも強いのであるが, F中男子の54%をtopとして想像外に低かった。香川県内出身者が殆んどと思われる香大女子でさえ38%の低い数字である。オリーブの少ない滋賀で0~3%の数字は当然かも知れない。バナナは実験温室又は観光温室でないで見られないわけであるが, 12~22%の数字であって割合高いと思われる。F中女子では小豆と同じ数字, 香大女子ではわずかに小豆を上回るものであって, りんごと共に観光的果樹の強さ(魅力というべきか)を物語るものであろう。そのほか, 小中学校教材と

表 1-1B 自県内の栽培面積と女子学生の「実っている風景を見た割合」

No	種 類	香 川			滋 賀		
		栽 培 面 積		見た割合	栽 培 面 積		見た割合
		S50	S54		S50	S54	
1	イ ネ	28,000 ^{ha}	24,900 ^{ha}	98 %	54,700 ^{ha}	50,200 ^{ha}	99 %
2	ム ギ	4,190	7,440	88	170	774	47
3	ソ バ	25	60	9	—	—	3
4	小 豆	58	73	17	260	242	18
5	大 豆	255	1,080	28	709	1,830	28
6	さつまいも	543	543	93	211	206	91
7	じゃがいも	785	606	84	386	399	85
9	たまねぎ	1,190	1,080	66	168	150	77
10	だいこん	438	432	90	794	668	83
11	ト マ ト	97	95	90	169	201	95
12	な す	172	183	90	292	312	100
13	か き	644	550	97	602	558	95
14	りんご	9	7	60	0	0	40
15	梨	58	56	33	49	42	62
16	く り	418	274	76	243	169	79
17	みかん	5,520	4,550	98	6	3	79
18	う め	148	124	59	104	101	69
19	も も	383	450	57	140	65	38
20	す も も		90	33	0	0	18
21	す い か	251	206	90	256	302	85
22	い ち ご	245	344	98	—	—	99
23	ぶ どう	649	654	88	49	48	72
24	び わ	87	109	90	6	4	58
25	オリーブ		35	38			3

注：イネは水陸稲計。大豆は乾燥子実

(各県農林水産年報参照)

して好適と思われる さつまいも (6), じゃがいも (7) が案外に低かった。即ち、いもの掘り上げ風景を見ていないことであって、香大男子は さつまいも で17%, F 中男子では じゃがいも で23%がこれを知らない。

秋の風物として代表的な色づいたカキ——これを見ていない者は F 中男子の12%を始めいずれにも存在している。カキの着果などは、たとえ市内であっても少し散歩に出れば見られるわけであるのに、大学生の中に見たことのない者が居るのは驚きの他ない。次に、男女によって差があるかどうかを見ると、

男子のほうが勝るのは小豆(4)、大豆(5)、里いも(8)、バナナ(26)等であり、女子のほうが勝るのは、さつまいも(6)、りんご(14)、びわ(24)、ぶどう(23)等であった。さつまいもの嗜好は男子より女子のほうが高いといわれるが、この差が いもの掘り上げに関心を寄せられるのかも知れない。また既に一部述べたように県によって沢山作付けされない作物は当然見る機会が少ないわけであって、表1-1Bに栽培面積を比較した。滋大は香大に較べて女子学生の「見た割合」についてはムギ(2)、もも(19)、みかん(17)、びわ(24)、オリーブ(25)等が低く、香大は滋大よりなし(15)が低い。これはその県の栽培面積の多少が「見た割合」に関係があるように思われ、ムギ、みかん、もも、すもも、ぶどう、びわ、オリーブについてはこのことが云える。しかし大豆、たまねぎ、うめについては関係なかった。なお、F中生と香大生では約4年の年齢差があるわけであるが、両者を比較してみて大学生のほうが著しく高いというものはなさそうで、わずかに男子の小豆、トマト、なしを数えるのみである。このことから、見る者は大体中学生段階までに見ておるのであって、その後は受験、運動その他に熱中して自然的なものから遠ざかり、見る機会が減ったりまたは関心がうすれるのかも知れない。これは、もっと対象を増やして調べるべき重要事と思われる。

2) 環境の差

前項で、一般的に「実っている風景を見た割合」が予想より低かったことを述べたが、それは各グループの平均的な値であって、家庭環境の差によってどう違うかを見たのが、表1-2Aである。大学生において(農家(専業農家、兼業農家)、自家で今も稲を作っている者及び(たとえ休閑中であっても)自家に田のある者を農的環境の者として扱い、それ以外の者を(言葉は適切でないが)非農的環境の者として分けてみた。

即ち、表1-2Aでは、農的環境の者は香大、滋大とも、そして男女いずれにおいても、非農的環境の者より、実っている風景を見た割合が高い。特に顕著なのが小豆、大豆であって、非農的環境の者は前者の50%にも至らない。里いもも(F中以外は)それに概当する。農的環境の者が勝るのは他に、ソバ、じゃがいも、たまねぎ、だいこん、なし、うめ、もも、すもも、びわ等である。

表 1-2A 実っている風景を見たもの——環境の差(その 1)

No.	(単位: %)																									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
香大 農的 環境	100	83	15	59	68	90	93	71	83	98	95	95	98	37	54	76	88	73	63	39	93	100	73	83	22	17
香大 非農的 環境	98	83	9	17	28	78	78	41	69	89	94	87	96	48	50	89	94	61	52	39	91	96	87	78	22	24
香大 農的 環境	100	94	12	41	53	88	94	71	82	100	94	94	100	53	41	82	94	88	82	53	94	100	88	94	29	35
香大 非農的 環境	98	85	7	7	17	95	80	29	59	85	88	88	95	63	29	73	100	46	46	24	88	98	88	88	41	12
滋大 農的 環境	100	86	0	57	76	100	100	86	100	100	100	100	100	43	62	95	76	90	57	38	95	95	81	57	0	29
滋大 非農的 環境	100	61	0	14	25	79	86	21	54	61	82	79	86	36	50	75	75	32	29	11	82	86	64	36	0	18
滋大 農的 環境	100	68	3	35	47	91	97	59	88	85	94	100	97	38	71	74	79	71	50	32	91	100	71	74	3	6
滋大 非農的 環境	98	31	2	4	13	91	76	27	69	82	96	100	96	40	53	87	82	67	29	4	82	100	73	44	2	16

表 1-2B 実っている風景を見たもの——環境の差(その 2)

No.	(単位: %)																									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
F 市 街 地	100	86	11	18	34	86	68	25	59	82	84	91	84	36	36	70	93	73	61	32	80	89	64	80	64	25
F 郊外の住宅地域	100	88	19	9	28	81	91	44	63	75	88	88	44	31	81	94	66	53	34	81	91	66	72	44	22	
F 農家も散在する郊外地域	100	100	14	19	33	83	75	42	64	92	69	89	94	36	39	72	92	64	42	28	81	94	56	81	50	11
F 市 街 地	92	74	5	8	10	87	72	13	49	72	82	85	92	49	15	67	92	54	33	18	62	85	67	74	36	13
F 郊外の住宅地域	100	94	13	19	31	97	94	47	59	78	88	84	91	56	41	81	100	66	56	44	81	97	88	94	50	22
F 農家も散在する郊外地域	100	98	21	26	37	93	84	47	72	100	91	95	98	44	33	77	95	84	49	35	91	98	77	93	53	19

反対に、りんごでは香大男女及び滋大女子において、くりでは香大男子及び滋大女子において、みかんでは香大男女及び滋大女子において、非農的環境の者のほうが勝っている。これらは観光的な旅行などによることが推察される。自然生活に縁遠い都市のサラリーマン家庭では、秋の好日、親子連れでくり狩り、みかんちぎり（観光みかん園へ）に出かけたり、また長じては独りまたは友人と秋の観光旅行に出て、りんごなどを見る機会もあるであろう。これに対して農的環境の者は、秋は一般に農繁期であり、たとえ家業またはその一部である農業を手伝わないとしても、親の多忙な時期にのうのうと観光などに出かけられるわけではないし、こういう家庭環境の相違がこの数字の差となって現われているのではなかろうか。

一方、F中では後記のように、農家率は極めて低く、農的環境の有無では論じられないので、表1-2Bのように、生徒の居住地区によって3分してみた。市街地、郊外の住宅地域、及び農家も散在する郊外地域である。これで見ると、男子では余り差は見られないが、女子では市街地居住者は、三者のうちで最も低い値を示すものが殆んどであった。そして、ソバ、小豆、大豆、里いも、なし等では、農家も散在する郊外地域居住者の50%にも至らなかった。ただ男子において、市街地居住者はもも、オリーブ、バナナでは高い値を示した。

次にF中において、表1-3に示すように、理科に対する関心度の差を見た。これは市街地を対象に選んだが、市街地が前表のように比較的「見た割合」が低かったのと、人数がややまとまっていたからである。即ち、別個に「理科に対する好きな程度」の問いかけを行ない、その判断によって「理科の好きな子」と「理科は余り好きでない子」に分けて調べた。男女とも「理科好き」は13種類以上にわたって「理科の好きでない子」より高い数字を示した。男子の「理科好き」は、ソバ、小豆、大豆、なし、ももにおいて、「理科好きでない」子の倍以上の数字を示した。また、さつまいも、じゃがいもにおいては「理科好き」は男女とも「好きでない」より約20%の数字の開きを示した。反対に「理科は好きでない」は男子においては、カキ、すももだけが勝り、女子においてはソバ、大豆、びわなどが高い値を示した。

表 1-3 実っている風景を見たもの——理科に対する関心度の差 (単位: %)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
男市街子地	97	87	17	23	40	90	77	27	60	83	80	83	77	47	40	77	90	70	77	27	80	83	70	73	63	23
	100	81	0	6	13	75	56	19	50	63	75	88	88	25	19	63	94	75	25	44	75	81	50	81	69	25
女市街子地	96	77	0	5	5	96	82	14	50	82	91	91	100	55	18	82	96	59	41	23	77	91	72	59	36	18
	89	78	11	11	17	78	61	11	50	61	72	78	83	39	11	44	89	50	28	17	44	72	61	89	44	6

表 2-1 自分で栽培したり栽培作業を手伝ったもの (単位: %)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
F 中男	42	4	0	2	6	40	35	8	12	19	33	36	14	3	2	7	16	8	5	3	18	32	6	14	3	2
F 中女	51	6	1	4	7	51	47	5	11	25	45	43	17	2	2	9	22	12	10	7	27	54	10	22	3	0
F 大男	68	14	2	5	9	37	34	12	25	31	29	32	20	0	3	8	17	14	8	3	29	34	9	12	0	0
F 大女	34	2	0	2	3	47	47	5	12	26	34	45	7	2	0	3	12	5	7	2	24	40	7	12	0	0
F 大男	57	8	0	8	14	45	43	20	27	39	29	29	18	2	10	6	6	6	4	2	33	35	8	0	0	0
F 大女	49	0	0	3	8	38	45	8	21	19	24	33	12	0	1	6	0	4	0	0	17	29	3	0	0	0

2. 自分で栽培したり栽培作業を手伝ったもの

次に、問いかけ文1)の26の種類について、次のような問いかけを行なった。

2) 上の種類について、自分で栽培したものがありますか。または栽培作業を手伝ったものがありますか。どちらでもいいから、あれば、その名目の下にアンダーラインを引いて下さい。(ない人は書かないで下さい)

その結果は表2-1のようであり、極めて厳しい数字を示している。全体で50%を越しているものは、F中女子、香大男子及び滋大男子のイネ、F中女子のさつまいも、いちごの合計5点だけである。いかに栽培植物に縁が遠いかが歴然としている。男女を比較してみると、F中及び香大では、さつまいも、じゃがいも、トマト、なす、いちごにおいて女子が男子より勝っていた。いずれも家庭菜園にも多く見られるものである。

一方、作業に従事したことのあるものを多いものの順に並べると、表2-2のようであった。多くはイネが第1位であったが、香大女子とF中女子では異っており、F中女子ではいちごが第1位であった。そしてその得票を男女で合計すると、大学生では、(1)イネ 151票、(2)じゃがいも 115票、(3)さつまいも 114票、(4)なす 96票、(5)いちご 95票、(6)トマト 81票、(7)だいこん 78票 となった。即ち、イネに次いで、じゃがいも、さつまいもが高い。これに対してF中の男女合計では、(1)イネ 105票、(2)さつまいも 103票、(3)いちご 97票、(4)じゃがいも 93票、(5)なす 89票、(6)トマト 88票、(7)すいか 51票となった。即ち、大学生よりもいちごが躍進している。いちごは別個の調査によって、女子学生及び女生徒の果物嗜好の1位または2位を占めているが、特に農家率が低く農家と縁のうすいF中で、女生徒が好きな果物であるいちごを自分の手で作りたいという意欲の結果であったならば歓迎すべきことであるが。一方、F中男子ではやはり嗜好調査によって、いちご、すいかは共に第2位にあったが、タッチした作業では表2-2のように余り上位にはなかった。

次に、表2-1で示したように、作業の経験率が極めて低いので、対象者の多い香大男子だけをとって、農的環境の者と非農的環境の者を比較した。それは表2-3のようであるが、農的環境の者は非農的環境の者に較べて、すべての種

表2-2 自分で栽培したり栽培作業を手伝ったことのあるもの

男			女			子		
順位	香		滋		大		F	
	種類	票数	種類	票数	種類	票数	種類	票数
1	イ	65	イ	28	イ	27	イ	38
2	さつまいも	35	さつまいも	22	さつまいも	27	イ	35
3	じゃがいも	32	じゃがいも	21	じゃがいも	26	さつまいも	30
3	いちご	32	だいちご	19	いちご	23	じゃがいも	26
5	なし	30	すいか	17	イチゴ	20	トマト	23
6	だいこん	29	すいか	16	トマト	20	なす	19
7	トマト	28	なす	14	だいこん	15	すいか	16
7	すいか	28	なす	14	すいか	14	だいこん	15
9	たまねぎ	24	たまねぎ	13	みか	7	みか	13
10	かき	19	かき	9	びわ	7	びわ	9
11	みかん	16			たまねぎ	7	かき	9

表2-3 自分で栽培したり栽培作業を手伝ったもの——香大男子における環境の差 (単位：%)

環境	No.																									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
農的	98	32	5	12	20	51	49	24	46	49	46	44	37	0	5	15	32	27	12	5	46	49	15	22	0	0
非農的	46	0	0	0	2	26	22	2	9	17	17	22	7	0	2	4	6	4	6	2	17	22	6	4	0	0

類について倍以上の数字を示した。

3. 稲作体験

稲作体験について知るために次のアンケートに答えてもらった。

1) イネを栽培したことがある人は、その体験場所に○をつけて下さい。(自家、学校、親宅、友人の家で、その他)
(ない人は記入しないで下さい)

2) 稲作の作業はどんなものをしましたか。下の表において、したことのある作業名またはその番号に○をつけて下さい。作業をしたことのない人は書かないで下さい。

作 業 名	作 業 を し た 回 数		
	1 回	2 回	3回以上
(1) 耕起(田を耕す, その他)			
(2) 田植え			
(3) 除草(草取り)または除草剤散布			
(4) 薬剤散布(いわゆる農薬の散布)			
(5) 施肥(肥料をやる)			
(6) 刈り取りまたは結東			
(7) 収納または運搬(うんばん)			
(8) 脱穀			
(9) 精米や乾燥など			
00 その他の作業(何を調べて下さい)			

3) 左の表について、その作業をした回数または日数をお聞きします。

欄(らん)内に○を入れて下さい。

(作業をしたことのない人は書かないで下さい)

4) 自家の職業についてお聞きします。該当のところへ○をして下さい。

(1)専業農家, (2)兼業農家, (3)会社員, (4)医師
など, (5)教員など, (6)商業関係, (7)その他

注: 専業農家とは兼業従事者が1人もいない農家です。兼業農家は世帯員の中で兼業従事者が1人以上いる農家です。

5) 自家の田のことについて、お聞きします。該当のところへ○をして下さい。

(1)自家に田はない, (2)かつて自家に田はあった, (3)自家に田はある, (4)自家で今も稲を作っている, (5)よく分らない

6) 両親の育った家についてお聞きします。[父の育った家には(1)田はあった, (2)田はなかった]
[母の育った家には(1)田はあった, (2)田はなかった]

7) 自分の体験した稲作作業について、お聞きします。

○ 楽しかったと思う作業がありましたか、あった場合は右のカッコの内へ書いて下さい()

○ 苦しかったり、もう2度とやりたくないと思う作業がありましたか。あったならば下のカッコの内へ書いて下さい。()

それを今までの資料と合せてまとめたのが、表3-1, 3-2, 3-3である。

まず表3-1についてみる。減反政策のため休耕中または全く耕作をしていない農家も存在するであろうから、農家率は定め難いので、「自家で稲を現在作っている」者を見ると、昭和56年では香大男子の32%を top として、いずれも少数であった。特に F 中では男子8%、女子4%の希少存在の形であった。香大女子では昭和53年の47%から年々下り56年には17%まで下っている。一方、「稲作の作業をした経験」は、グループによって、また年によって差はあるが40%代から60%代である。そして、水田農家であっても自家の作業を全くやったことのない者がかかなりいることが分った。昭和56年では、香大男子19%、滋大男子5%、F 中男子39%、香大女子44%、滋大女子29%、F 中女子70%である。概して女子に高い。しかしこれは現代の農家の稲作形態が機械化、専門化し、

表 3-1 稲作経験について (単位: %)

	男						女						子					
	香		大		滋	大	F	中	香		大		滋	大	F	中		
	S	53	S	55	S	56	S	56	S	53	S	54	S	55	S	56		
自家で稲を作っている	39		32	※	20		8		47		32		29		17		29	
稲作の作業をした経験がある	54		68		61		46		55		52		55		41		52	
現有・既有的水田農家で自家の作業経験がある	97		81		95		63		91		91		100		56		71	
全 体	49		56		57		39		39		36		41		40		28	
水田農家	92		83		94		70		72		70		88		80		44	
非農家	21		43		35		36		9		18		22		32		16	

※ 休閑中のものも含めた。既有的の水田農家とは、自家に田はあるが作っていない者とかつて自家に田があった者である。

表 3-2 稲作労働の経験場所

		年	学校	自家や学校外	学校と自家の両方	不明	合計	学校の割合 %
男	香大	55	11	45	5	0	61	26
	滋大	56	13	39	7	6	65	31
子	F中	56	6	22	1	0	29	24
	F中	56	31	14	6	0	51	73
女	香大	55	4	25	3	0	32	22
	滋大	56	5	17	0	2	24	21
子	F中	56	8	27	7	0	42	36
	F中	56	38	17	6	0	61	72

女子供では手伝いになりにくいという点もあろう。

また、田植えの経験は非農家は水田農家よりどのグループにおいても低く、又女子は男子より経験率が低い。これは田植えの機械化が進んだため女子では扱にくいこともその一因であろう。F中では自家の稲作付率が極めて低いが、稲作作業や田植えの経験率は大学生と較べて せん色はない。

さて、稲作作業はどこで経験したのであろうか。それを表 3-2 にまとめた。大学生の学校での経験率は21~36%に過ぎないが、F中では男子73%、女子72%の高い数字を示した。

次に、稲作作業を10に分類して、どの作業を経験したかを調べてみると、表 3-3 のようであった。これは男子と女子では経験内容に差があるようである。香大女子についてみると、年によって多少の数字の動きはあるが、毎年似た傾向のようであり、田植え、刈り取り、運搬、脱穀の4項目が高く、他の作業項目は低い数字である。滋大女子でも同じように見受けられる。これに対して男子学生は、多くの項目の作業経験をもっているように数字の上で判定される。これは体力の差などもあるので、ある程度やむを得ないであろうが、稲の生育過程にしたがって多くの作業内容に経験をもつことが稲を理解するためには良いことであるので残念なことと思われる。これは稲に限らず栽培植物一般につ

表 3-3 経験した作業内容 (単位: %)

No.	作業内容	男			子			女			子			
		香	大	滋	F	中	香	大	滋	F	中	大	F	中
		56	56	56	56	56	53	54	55	56	56	55	56	56
1	耕	46	55	55	55	6	10	9	21	20	9	21	20	
2	田 植	82	97	86	86	72	80	75	96	54	75	96	54	
3	除 草	46	52	45	45	9	24	13	13	20	13	13	20	
4	薬 劑 散 布	31	34	22	22	16	22	16	13	7	16	13	7	
5	施 肥	34	38	31	31	6	16	6	0	10	6	0	10	
6	刈り取りまたは結束	72	83	37	37	69	38	34	50	71	34	50	71	
7	収納または運搬	69	76	41	41	不明	47	38	46	46	38	46	46	
8	脱 穀	60	66	31	31	56	27	38	46	37	38	46	37	
9	精米や乾燥など	35	69	25	25	0	0	0	8	27	0	8	27	
10	そ の 他	9	10	6	6	0	0	0	0	12	0	0	12	

いていえることで、一貫した経験をもつことが重要である。F 中では田植え、除草が多く、刈り取りまたは結束の数字は大学生より低い。これは体力の不足などが関係するものと思われる。

「楽しかったと思う作業」について、1項目3回以上の経験者（多分農家出身）からは余り声が上らないのは例年のことであり、反対に1回の経験者は色々書いている。一番多いのは田植えである。したがって「苦しかったり、もう二度とやりたくないと思う作業」にしぼって、3回以上の経験者の中からまとめると表3-4のようである。

表3-4 苦しかったり、もう二度とやりたくない作業
(香大男子)

年	S53	S54	S55	S56
耕 起	—	—	—	—
田 植 え	第2位	第1位	第2位	第1位
除 草	—	—	第3位	第3位
薬 剤 散 布	第4位	第2位	第1位	第2位
施 肥	—	—	第5位	—
刈り取り	第3位	第2位	第4位	第2位
収穫または運搬	—	—	第4位	第2位
脱 穀	第1位	第3位	} 第4位	第5位
精米や乾燥	—	—		第5位

即ち、田植えが最も多く、それに次いで薬剤散布である。香大の学生は香川を中心とする西南暖地出身が多く、全国的にみて病虫害多発地帯であるので、農業の濃度・量は平均的には相当なものである。したがって、「楽しかったと思う作業」の項に（一つもなかった）とか、「苦しかった作業」の項に（すべての作業）と書いているアンケート回答を毎年みているが、うなづけることである。学校園と違って実際農業は営業であるから苦しさも当然伴うわけである。

最後に「両親の何れかの育った家に田のあった者」を調べたところ、香大男子80%、滋大男子80%、香大女子69%、滋大女子82%、F中女子63%であった。現在の稲作付け率がそれぞれ32%、20%、17%、29%、4%であるから、その比は40%から6%の中であって、学生・生徒の自家環境は急速に稲作より遠ざかっている。かつての流行語をもじれば「稲作は遠くなりけり」である。

ま と め

5月下旬から6月上旬にかけて、香川大学、滋賀大学の1年生を中心に講義中にアンケートをとり、また同じ5月上旬に高松市内のF中学から同じアンケートをとった。それらを未発表資料も合せて「学生・生徒の農業経験」としてまとめてみた。この種の調査は公表されたものが少ないので不十分な内容ながらまとめた次第である。これは大学生の専門的無気力、無関心、不器用—これらがどういうところに由来するかを知るための一つの突破口になりはしないかと考える。今回のアンケート結果から、まとめらしいまとめが出来ないが、アンケートを計算しているときに気付いた2つの点がある。

1つは「表I-1A」の説明で述べたが、F中生徒と香大学生とは年齢的に約4年の開きがあるのに「実っている風景を見た」率は両者にそれほどの差が見られないことである。あるいは自分の眼で見て知るという（栽培植物に関する知識獲得欲のようなもの）は中学生段階までに大体終了に近づき、無関心派は無関心のままで成長するのではなからうかという疑いを持つ。F中男子の市街地居住者は他に較べて「見た率」が低い、その中を分けてみると「理科好き」の子は「理科好きでない」子より断然高い数字を保っている。好奇心の差によるのであろう。

講義（または授業）、「人に教えられる」、テレビ、新聞等々の文化的方法によるのではなく、「自分だけの力でどんどん見て知り感じていく」—これが一番大事ではないかと思うことである。古い言葉であるが「自然を知り自然に学ぶ」は自己開発、創造性の発達に最適ではなからうか。今回の調査は、農業に関する接触の実態を通じて、現代教育の欠陥の一つにおぼろげながら触れたような気がする。

もう1つは一貫的経験の必要性である。表3-3「稲作において経験した作業内容」の項で述べたが、男子に較べて女子の経験は特定の4項目に集中的である。したがって農業経験として体力を伴う稲作が適材であるかどうかは別問題として農業経験は一種類について一貫的、継続的であるべきではないか。乳幼児保育においてときたま「だっこ」するだけではモノの役に立たない例をあげ

るまでもなく、タネまきから収穫までの継続作業の必要性を改めて痛感した
ことである。